

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463531

研究課題名(和文)食物アレルギーを持つ学童の適応的な学校生活にむけた協働モデルの構築

研究課題名(英文) Collaborative approach for adaptive school life of children with food allergy

研究代表者

山田 知子 (YAMADA, Tomoko)

中部大学・生命健康科学部・准教授

研究者番号：80351154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：食物アレルギーを持つ学童期の子どもへのインタビューより、学校での悩みは、クラスメートからのからかい/意地悪、クラスメートから理解されるか不安、クラスメートと同じことが出来ない、誤食への不安、エピペンを打つことへの躊躇であった。これらの悩みを親に気持ちを吐露する、嫌なことをやり過ごす、給食に細心の注意を払う、疎外感をなくす工夫をする、学校の先生を信頼して助けを求めるといった方法で対処していることが明らかとなった。食物アレルギーを持つ子どもの安心した学校生活に向けて、仲間からの理解を得るための支援、安全管理への参加の促し、周囲に助けを求める相談スキルを育てていくことが重要であると示唆された。

研究成果の概要(英文)：Nine children participated in interview to clarify collaborative approach for the adaptive school life of the children with food allergy.

Half of them responded that they faced problems at school, which included teasing by classmates, anxiety that classmates may not understand them, inability to participate in the same activities as classmates, fear of accidental ingestion, and unease with injecting the EpiPen®. Approaches taken to resolve these problems included talking to their parents regarding their feelings, letting go of negative experiences, taking extra caution with regard to school lunch, making efforts to reduce the sense of alienation, and trusting the teacher and asking for help in case of anaphylaxis. These results revealed the importance of support so that he/she may be better understood by classmates, encouraging participation in a child's safety management, and teaching good communication skills so the child could receive help from adults around him/her.

研究分野：小児看護学

キーワード：食物アレルギー 学校生活 学童

1. 研究開始当初の背景

食物アレルギーの治療は、正しい原因アレルゲンの診断に基づいた必要最小限の除去食をポイントとした食事療法と、出現した症状に対する対症療法からなり、食生活を中心とした配慮が必要となる。学童期の子どもにおいては、食物除去による学校生活上の制限や、誤食やアレルゲンへの接触の機会によりアナフィラキシーをおこしうる不安を抱えていると考えられる。そのため、食物アレルギーを持つ子どもの安心した学校生活を支えていくうえでは、子ども自身を含め、親、学校教職員、医療関係者の連携が必要となる。親、学校教職員を対象とした先行研究はいくつかあるが、子ども自身がどのような不安を抱えているのかや、どのように取り組んでいるのかという視点での報告はみられない。アレルギーの子どもの制約された日常生活の中にも子どもらしい心身の成長ができるよう配慮や工夫をすることで、長期にわたって治療意欲をもち、肯定的な自己感や安定した人間関係を形成し、適応的な生活が促進されることが考えられる。そこで、学校生活上の悩みを子どもの視点にたって理解し、必要な支援を見出すことが重要と考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、食物アレルギーを持つ学童期の子どもが、学校生活の中で食物除去に関連してどのような悩みを抱えているのか、アナフィラキシー(あるいはアナフィラキシーショック)の体験をどのように捉えているのかを明らかにすることである。食物アレルギー児自身の思いに耳を傾け、制限された生活においても適応的な生活を送れることができることを目指し、患児を中心とした家族、学校職員、医療従事者との協働モデルを構築することである。

3. 研究の方法

本研究は質的記述的研究法を用いた質的帰納的横断研究デザインである。インタビューの事前調査として、(1)子どもの年齢、学年、性別など

の属性、(2)食物アレルギーの病型、(3)制限あるいは除去が必要な食物の種類、(4)緊急時に備えた処方薬の有無と管理方法、(5)指示されている学校生活上の留意点と実際に学校で取り組んでいること、(6)学校でのアナフィラキシーの経験の有無について、保護者に回答を依頼した。また、外来診療録より治療内容についての情報を得た。

半構成的面接では、(1)学校生活上の制限においてどのような悩みを抱えているか、(2)その悩みを、誰とどのように解決したか、(3)悩みがないと答えた場合、どのような取組みがその理由と思うかについて、子どもに自由に語ってもらった。保護者の同席については子どもの意向に沿ったセッティングとし、子どもの自由な語りを妨げないよう配慮し、インタビュー後に子どもの語りについて保護者が感じたことを補足情報として得た。また、面接は外来受診の待ち時間など対象者の希望にて調整し、1回30分程度とした。面接内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録として記述した。インタビュー内容は質的帰納的に分析した。インタビュー内容より逐語録を作成し、その逐語録を研究目的に焦点を当てながら意味のあるまとまりで区切り、語りの内容を損なわないようコード化した。次にコードの相違点、類似点を比較しながら類似するもので集めてコードの意味内容を代表するよう名称をつけ、カテゴリー化した。分析の全過程において、共同研究者間でディスカッションをすることで解釈の確証性を高めるよう努めた。

4. 研究成果

(1) 食物除去に関連した学校生活での悩みと解決の方法

調査への参加は、小学2年生から6年生の子ども(男児5名、女児4名)とその保護者9組であった。エピペンを所持している者は7名で、使用経験があるのは2名であった。アナフィラキシー症状を経験している者は7名でそのうち学校で経験した者は2名であった。

9名のうち5名が食物除去に関連して学校生活での悩みがあったと答え、[クラスメートからのからかい、意地悪][クラスメートから理解されるか不安][クラスメートと同じことができない][誤食への不安][エビペンを打つことへの躊躇]の5つのカテゴリーで形成された(表1)。これらの悩みをどのように解決しているかは、[親に気持ちを吐露する][嫌なことをやり過ごす][給食に細心の注意を払う][疎外感をなくす工夫をする][学校の先生を信頼して助けを求める]の5つのカテゴリーで形成された(表2)。4名は学校生活での悩みがないと答え、学校での取り組みとして[給食に細心の注意を払う][疎外感をなくす工夫をする][クラスメートからの理解を得る][学校の先生を信頼して助けを求める]の4つのカテゴリーが形成された(表3)。

表1. 食物アレルギーに関連する学校での悩み

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. クラスメートからのからかい、意地悪 2. クラスメートから理解されるか不安 3. クラスメートと同じことができない 4. 誤食への不安 5. エビペンを打つことへの躊躇 |
|---|

表2. 学校での悩みをどのように解決しているか

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 親に気持ちを吐露する 2. 嫌なことをやり過ごす 3. 給食に細心の注意を払う 4. 疎外感をなくす工夫をする 5. 学校の先生を信頼して助けを求める |
|--|

表3. 学校での悩みがない児の取り組み

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 給食に細心の注意を払う 2. 疎外感をなくす工夫をする 3. クラスメートからの理解を得る 4. 学校の先生を信頼して助けを求める |
|---|

[クラスメートからのからかい、意地悪]や[クラスメートから理解されるか不安]というクラスメートとの関係に関連した悩みに対しては、<学校で我慢していたことを、家に帰って吐きだし泣いた>や<親に相談して、先生から友人に聞かないように言ってもらった>など[親に気持ちを吐露する]ことや、[嫌なことをやり過ごす]という対処

方法で解決していた。

[クラスメートと同じことができない]は、食材を扱う調理実習での悩みであるが、<食べられるものだけ食べて、先生の手伝いをする>といった[疎外感をなくす工夫をする]ことで解決していた。悩みがないと答えた事例においても、給食場面での[疎外感をなくす工夫をする]ことや、担任の先生の協力を得て[クラスメートからの理解を得る]という取り組みが悩みがない理由として挙げられた。

[誤食への不安]は、学校でのアナフィラキシーを実際に経験している2事例から挙げられたカテゴリーで、<人のやることには間違いがある><給食で他児が牛乳を飛ばしたり、牛乳瓶を落として割ってしまう><見た目でわかりづらい食品は不安になり食べるのをやめてしまう>というコードから抽出された。[誤食への不安]に対しては、誤食を防ぐことが大切であると認識しており、親や先生だけでなく、子ども自身も含めて<献立表を確認する(子ども、親、先生)>ことや<クラスメートと離れて座り、牛乳の飛散を防ぐ>など[給食に細心の注意を払う]という取り組みをしていた。

[給食に細心の注意を払う]については、<献立表の確認をする><わからないときや、おかわりは先生に聞くようにしている>など、悩みの有無に関わらず9名全員が何らかの取り組みを行っていた。

学校での誤食によるアナフィラキシーに対して、エビペン使用経験のある3事例が[エビペンを打つことへの躊躇]を悩みとし、そのためにも<先生はエビペンがどこに入っているか聞いてくれているから大丈夫><先生がいるから怖いとかは思わない>など[学校の先生を信頼して助けを求める]ことが大事であると考えていた。誤食への不安がない事例においても、<症状がでたら担任の先生に言う><先生にエビペンを打ってもらって、救急車を呼んでもらって治してもらおう>と[学校の先生を信頼して助けを求める]ことが大事と語っていた。

以上の結果より以下の点が明らかとなった。

子ども達は、食物除去があることをクラスメートに理解されるかを悩みとしており、特別扱いと感
じることのない配慮を受けることで、疎外感を少
なくすることが大切であるといえる。また、子ども
達が日々の悩みを信頼できる大人に打ち明ける
ことで、対処していく力を育てていることも明らか
となった。

約半数の子どもは学校生活での悩みがないと
しており、給食に細心の注意を払うといった安全
管理の中に子ども自身が参加できていることが
安心の実感につながる事が明らかになった。

アナフィラキシー症状が起こった際の取組み
について、エピペンを自分で打つことには躊躇
があり、学校の先生を信頼して助けを求めること
が大事であると認識しており、子どもの相談スキ
ルを育てていくことが重要であると示唆された。

(2) 今後の展望

本研究の目的は、食物アレルギーを持つ子ども
が制限された生活においても適応的な生活を
送れることができることを目指し、患児を中心とし
た家族、学校職員、医療従事者との協働モデル
を構築することである。インタビュー調査を踏ま
え、子ども達の日々の悩みやアナフィラキシーの
体験を振り返るなかで具体的な対処方法を導き、
自己管理への自信を育むことを意識した関わり
の重要性が示された。そこで、食物アレルギー
で様々な制限がありながらも、自信をもって学校
生活を送れる力を育むことをねらいとした「食物
アレルギー親子教室」のプログラムを計画し、プ
ログラムの評価と今後に向けた参加者のニーズ
把握をすることを次の課題とした。

食物アレルギー親子教室は以下の 4 つの目標
を設定し、目標ごとのセッションを計画した。

目標 食物アレルギーとはどのような病気なの
か理解できる。

目標 学校での誤食を防ぐ方法が理解できる。

目標 学校で誤食をした時の対処方法につい
て理解できる。

目標 家族の絆のワークを通して、日常生活に

おける家族の役割や協力の大切さを知ることが
できる。

上記プログラムは研究期間内での実施評価に
至らなかったため、残された継続課題とした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

(雑誌論文) (計 1 件)

山田知子、石井真、浅野みどり、杉浦太一、
縣裕篤; 食物アレルギーを持つ学童の学校生活
における悩みと取組みの実際、日本小児難治
喘息・アレルギー疾患学会誌、査読有、2016 年
(印刷中)

(学会発表) (計 1 件)

Tomoko Yamada、Midori Asano、Taichi
Sugiura、Makoto Ishii; Experience of food
restrictions and anaphylaxis among school
children with food allergies、The Asia Pacific
Paediatric Nursing Conference、27 Sept. 2014、
Kowloon (Hong Kong).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 知子 (YAMADA、Tomoko)
中部大学・生命健康科学部・准教授
研究者番号: 80351154

(2) 研究分担者

石井 真 (ISHII、Makoto)
中部大学・生命健康科学部・講師
研究者番号: 70338002

浅野みどり (ASANO、Midori)
名古屋大学・医学系研究科・教授
研究者番号: 30257604

杉浦太一 (SUGIURA、Taichi)
岐阜大学・医学部・教授
研究者番号: 20273203